

2012 年度 明星大学心理相談センター活動報告

箕浦亜子・千葉真理子 明星大学心理相談センター

I はじめに

明星大学心理相談センターは 2001 年に設立されて以来、明星大学大学院人文学研究科心理学専攻臨床心理学コースの教育研修機関として、130 名を超える臨床心理士を目指す大学院生たちの臨床実習を担ってきた。また、地域に貢献する相談機関として、日々、子どもから大人まで様々なクライアントに利用されている。

設立から 10 年が過ぎ、体制が充実、安定し、地域との連携も深まった感がある一方で、当センターにおける今後の新たな課題もちょとみえてくる時期でもある。

以下に、2012 年度の明星大学心理相談センターの活動概要を報告する。

II 相談活動

1 面接形態

当センターでは、相談活動をその形態によって分類集計している。その分類と内容は表 1 の通りである。

2 面接回数

今年度との比較として、過去 5 年間の面接回数の推移を表 2 に示した。それをグラフ化したものが図 1 である。

表 1 面接形態

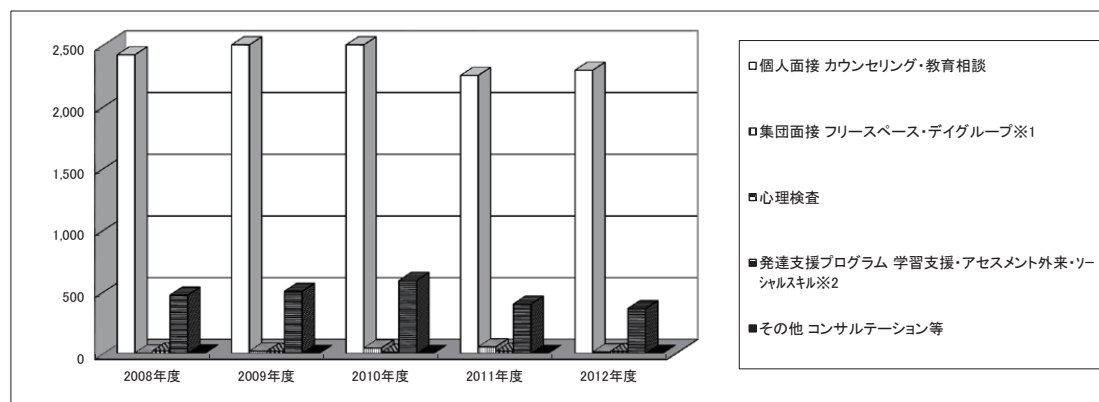
分類名称	含まれるもの	内容
個人面接	カウンセリング	子どもの心理的、発達上の問題について子ども自身への援助や保護者への助言（教育相談）と、主に成人以降の方を対象にしたカウンセリング
	親子相談	
集団面接	フリースペース：じゃんぼ	主に小・中学生の不登校の子どもたちへの居場所の提供および集団を通じた援助
心理検査		様々な心理検査、発達検査
発達支援プログラム	学習支援：ニッポ	発達障害をもつ小学生への個別の学習支援。及び、発達障害を見立てるための検査と面接を行うアセスメント外来
	アセスメント外来	
その他	コンサルテーション	関係機関にむけたコンサルテーション

表2 面接回数の推移

内訳		年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
個人面接	カウンセリング・教育相談		2,419	2,654	2,597	2,252	2,294
集団面接	フリースペース・デイグループ※1		2	17	42	52	10
心理検査			19	15	8	16	13
発達支援プログラム	学習支援・アセスメント外来・ソーシャルスキル※2		472	503	590	400	363
その他	コンサルテーション等		3	0	0	0	1
合計			2,915	3,189	3,237	2,720	2,681

※1 デイグループ：2007年度末 ※2 ソーシャルスキル：2010年度末でそれぞれ終了

図1 面接回数の推移



この5年間を振り返ってみると、専門相談員が増員された2005年以降、新規ケースや大学院生の数が増加し、当センターの業務量としても、面接室やプレイルームのハード面でも上限に達した時期を経過してきた。そして、昨年度あたりから、大学院生の入学者数が適度に落ち着いたことで、随時新規ケースを受理することが可能となり、継続的なケースおよび大学院生のスーパーヴィジョンを行なっていくための適正な業務量になったという流れがある。

2012年度は、前年と比べると、総面接回数はやや減少しているが、これは、フリースペースの実施回数が減ったことによる。フリースペースの利用メンバーが、卒業や登校復帰などによって来

所しなくなった時期に、新規の希望者もいなかったため実施回数の少ない月があった。

表3の月別面接回数について、夏休みの8月および年始休みの1月で回数が少なくなるのは例年のとおりである。

2012年度は前年よりも個人面接は若干増加している。とくに、表4で示したとおり、新規ケースの受理が、前年に比べて多くなっている（+13件）。

3 来談者

新規ケースの内訳をみてみると、これまで一番多かった小学生を抜いて、大学生・成人が大幅に増加している(表5)。そのためか、来所経路は「学

表3 2012年度 面接形態および月別面接回数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
個人面接	202	167	196	200	164	165	215	194	200	184	209	198	2,294
集団面接	1	0	1	2	2	0	1	1	1	0	0	1	10
心理検査	1	1	1	1	1	0	2	2	2	0	1	1	13
発達支援プログラム	31	33	38	47	8	39	45	33	46	14	14	15	363
その他	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	235	201	237	250	175	204	263	230	249	198	224	215	2,681

表4 月別受理面接数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2012年度	13	0	6	14	7	3	13	8	6	9	3	2	84

表5 2012年度 年齢別・性別相談件数(新規)

性別/年齢	就学前	小学生	中学生	高校生	大学生・成人	合計
男	0	15	11	2	11	39
女	2	8	5	6	20	41
合計	2	23	16	8	31	80

表6 2012年度 来所経路(新規)

相談経路	2012年度
他機関からの紹介	27
学校からの紹介	21
相談員を知っている	11
相談に来ている人からの紹介	8
ホームページ	6
当センターが所属機関の指定相談室	4
知人から紹介	1
その他	2
合計	80

校からの紹介」が従来多かったことに比して、近隣の医療機関や精神保健福祉関連機関など、「他機関からの紹介」の数が一番多くなっている(表6)。子どもから大人まで幅広く対応している状

況が地域にも浸透してきたと思われる。

また、2012年度の新しい事業としては、ある企業からの依頼により、職員の指定相談室として、カウンセリングを始めたことが挙げられる。これ

は、地域貢献でありつつ、大学院生が成人のケースを担当する機会が増えることにもつながると思われる。

指定相談室を担うことで成人ケースが若干増えたと思われるが、それを除外しても全体に大学生・成人が増加している。

4 相談内容

小中学生の相談は依然として多く、相談内容別件数としては、「発達のかたより」が最も多い。何らかの発達の問題が背景にあり、学校でトラブルをよく起こすために学校から紹介されるケースが多い。次に「不登校」「神経症的症状」が目立つ。今年度「神経症的症状」としてみられたのは、

緘黙や強迫症状、心因的身体症状などのケースであった（表7）。

大学生・成人のケースが増加したということで、19歳以上の相談内容別件数をみると、「対人関係」「自分の生き方」の相談が増えている（表8）。その内実は様々ではあるが、発達障害、知的障害、精神障害を抱えるご本人が不適應の状態で困っている、またそうした障害を抱える子どもや配偶者をもつ家族としての相談、仕事はしているが人間関係でうまくいかない、一見ふつうに生活できているが生い立ちや家族関係で消化できないものがある、将来の進路がみえないといった主訴などがみられる。

表7 2012年度 相談内容別件数 18歳以下（新規）

主 訴／年 齢	就学前	小学生	中学生	高校生	合 計
発達のおくれ			1		1
発達のかたより (高機能自閉症・アスペルガー・LD・ADHD 他)		11	1	1	13
不登校		1	4	4	9
集団不適應		1			1
非行・暴力			1		1
神経症的症状	1	4	2	1	8
その他	1			2	3
アセスメント		6	7		13
合 計	2	23	16	8	49

表8 2012年度 相談内容別件数 19歳以上（新規）

主 訴	2012年度
対人関係	8
家族関係	6
自分の生き方	7
子どもの問題（発達障害不登校・問題行動・育て方など）	3
神経症的症状	3
その他	4
合 計	31

5 スーパーヴィジョン

臨床活動と同時に大学院生の実習機関でもある当センターにおいて、大学院生や研究員（後述）の担当ケースに関してスーパーヴィジョンを行うことも主要な業務である。大学院生や研究員が担当するすべてのケースに関して、専門相談員がスーパーヴァイザーとなり、毎回のセッションについてスーパーヴィジョンを行なっている。

表9に2012年度に在籍した研修員・研究員の数を示した。研修員とは、明星大学大学院人文学研究科心理学専攻臨床心理コースに在籍する大学院生が、当センターで実習する許可を得た際の立場である。研究員とは、当大学院を修了した者のうち、修了後も当センターで臨床研修を希望し、

承認された際の立場である。

研究員が前年に比べ、2012年度は12名減少している。その理由としては、2012年度から、研究員の更新条件に、臨床研究の成果を本研究紀要または学術誌に投稿する、実践報告書または臨床研究成果報告書を提出する、のいずれかを満たすという要件を設けたため、その条件を満たせなかった者が更新できなかったことと考えられる。条件は厳しくなったが、卒後教育の一環として、ケースを担当し、スーパーヴィジョンも受け、経験をつめる分、その成果を形にし、意欲と責任をもって臨んでほしいとの思いがある。

この研究員の減少によって、スーパーヴィジョンの回数が前年度より減少している（表10）。

表9 研修員・研究員在籍数

	2012年度
研修員	24名
研究員	20名
合計	44名

表10 研修員・研究員に対するスーパーヴァイズ回数（1回50～60分）

単位：回

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2012年度	40	46	41	35	33	30	37	43	38	35	50	50	478

Ⅲ 年間事業報告

2012年度に行なわれた事業を表11にまとめた。毎月2回ある合同ケースカンファレンスはケース理解を深めるための貴重な研修の時間であるが、特別合同ケースカンファレンスは、外部講師を招き、ケースを理解するための深い示唆や新たな視点が得られることで、参加者にとって、たいへん勉強になる機会である。2012年度は3回開催した。

また、恒例の公開講演会は今年度3月に予定していたが、講師の急用でキャンセルされたため、

代行をたてるには時間がなく、やむなく開催できなかった。2012年度のみも含めて、来年度はよりよい公開講演会を開催したい。

Ⅳ おわりに

丸10年がすぎたところで、専属の事務職員も交代となったのを機に、これまでの業務体制や料金体系など全体に見直しをはかり、あらためて当センターの土台を整備した1年でもあった。これまで築いてきた、地域やクライアントからの信頼を維持しつつ、臨床実習の場として、よりいっ

そう質の向上も同時に目指したい。そのために、2012年度から、専門相談員と実習指導員で、初学者にとってのスーパーヴィジョンに関する調査研究を行なっている。

また、2013年度からは、卒後教育の充実のために、修了生が当センター以外で担当したケースのスーパーヴィジョンも受けられる枠を設けることにした。

これからも、当センターで臨床経験とスーパーヴィジョンを積み重ねた研修員・研究員たちが、心理臨床的な援助とはどういうことか、という本質をしっかりとつかみ、クライアントに寄り添える心理臨床家として臨床現場に巣立てるよう、われわれスタッフも日々尽力したいと思う。

表 11 心理相談センター 2012年度年間事業・活動報告

	センター事業関係	ケースカンファレンス・地域貢献関係
4月	センターガイダンス 臨床オリエンテーション合宿 1泊2日 第1回センター会議 第1回研修員会議	第1回合同ケースカンファレンス 第2回合同ケースカンファレンス
5月	第2回センター会議 第2回研修員会議	第3回合同ケースカンファレンス 第4回合同ケースカンファレンス
6月	第3回センター会議 第3回研修員会議	第5回合同ケースカンファレンス 第6回合同ケースカンファレンス
7月	第4回センター会議 第4回研修員会議 第1回運営委員会	第7回合同ケースカンファレンス 第8回合同ケースカンファレンス
8月	第5回研修員会議 玩具類下見・発注 センター大掃除	第9回合同ケースカンファレンス 第10回合同ケースカンファレンス
9月	第5回センター会議 第6回研修員会議	第11回合同ケースカンファレンス 第1回特別合同ケースカンファレンス
10月	第6回センター会議 第7回研修員会議	第12回合同ケースカンファレンス 第13回合同ケースカンファレンス
11月	第7回センター会議 第8回研修員会議 第2回運営委員会	第14回合同ケースカンファレンス 第15回合同ケースカンファレンス
12月	第8回センター会議 第9回研修員会議 玩具類下見・発注	第16回合同ケースカンファレンス 第17回合同ケースカンファレンス
1月	第9回センター会議 第10回研修員会議	第18回合同ケースカンファレンス 第2回特別合同ケースカンファレンス

	センター事業関係	ケースカンファレンス・地域貢献関係
2月	第10回センター会議 第11回研修員会議 センター大掃除 研究紀要 No6 発行	第19回合同ケースカンファレンス 第3回特別合同ケースカンファレンス
3月	第11回センター会議 第12回研修員会議	第20回合同ケースカンファレンス 第21回合同ケースカンファレンス
年間	センター会議 全11回 研修員会議 全12回 運営委員会 全2回 センターガイダンス 全1回 臨床オリエンテーション合宿 全1回 研究紀要発行 全1回	合同ケースカンファレンス 全21回 特別合同ケースカンファレンス開催 全3回